

雪だるま

小川未明

青空文庫

いいお天気てんきでありました。もはや、野のにも山やまにも、雪ゆきが一面めんに真まつ白しろくつもつてかがやいています。ちようど、その日ひは学が校っこうが休やすみでありましたから、次じろう郎ろうは、家いえの外そとに出でて、となりの勇ゆう吉きちといっしよになつて、遊あそんでいました。

「大きな、雪ゆきだるまを一つつくろうね。」

二人ふたりは、こういつて、いっしよけんめいに雪ゆきを一ひとつ処ところにあ

つめて、雪ゆきだるまをつくりはじめました。

そこは、人ひと通とおりのない、家いえの前まえの圃はたけの中なかでありました。梅うめの木きも、かきの木きも、すでに二、三尺じやくねも根ねもとのほうは雪ゆきにうずもれていました。そして、わらぐつをはきさえすれば、子こ供どもたちは

はたけうえ じゆう
圍の上を自由に、どこへでもゆくことができたのであります。

あたまうえ そら
頭の上の空は、青々として、ちようどガラスをふいたように

さえていました。あちらこちらには、たこがあがつて、籐の鳴り

音が聞こえていました。けれど、二人は、そんなことにわき見も

せずに、せつせと雪を運んでは、だるまをつくっていました。昼

前かかつて、やつと半分ばかりしかできませんでした。

「昼飯を食べてから、またあとを造ろうね。」

二人は、こういつて、昼飯を食べに、おのおのの家へ帰りま

した。そして、やがてまた二人は、そこにやつてきて、せつせと、

雪だるまを造っていました。

ほんとうに、その日は、いい天気でありましたから、小鳥も木

の枝えだにきて鳴ないていました。しかし、冬ふゆの日は短ひくて、じきに日ひは暮くれかかりました。西にしの方ほうの空そらは、赤あかくそまって、一面めんに雪ゆきの上うえはかげつてしまいました。その時じぶん分にやつと、二人ふたりの雪ゆきだるまは、みごとにできあがったのであります。

「やあ、大おおきいだるまだなあ。」といつて、二人ふたりは、自分じぶんたちのつくつた、雪ゆきだるまを目めをかがやかして賞しょう歎たんしました。次じろう郎ろうは、墨すみでだるまの目めと鼻はなと口くちとをえがきました。だるまは、往おう来らいの方ほうを向むいてすわっていました。二人ふたりは、明日あしたから、この路みちを通とおる人ひとたちがこれを見みて、どんなにかびつくりするだろうと思おもつて喜よろこびました。

「きつと、みんながびつくりするよ。」と、勇ゆう吉きちはいつて、こ

おどりました。そして、懐ふところの中から自分じぶんのハーモニカを取り出だして、だるまの口くちに押しつけました。ちようど、だるまが夕陽ゆうひのなかに赤あかくいろどられて、ハーモニカを吹ふいているように見みえたのであります。

空そらの色いろは、だんだん冷つめたく、暗くらくなりました。そして、雪ゆきの上うえをわたって吹ふいてくる風かぜが、身みにしみて寒さむさを感じかんさせました。

「もう、家いえへ帰かえろう。そして、また、明日あしたここへきて遊あそぼうよ。」
こういって、その日ひの名残なごりをおしみながら、別わかれて、二人ふたりは自分じぶんの家いえへ入はいってゆきました。あとには、ただひとり大おおきな雪ゆきだるまが、円まるい目めをみはって、あちらをながめていました。

次郎じろうは、夕飯ゆうはんを食たべるとじきに床とこの中なかに入はいりました。そして、

いつのまにかぐつすりと眠ねむつてしまいました。ちようど、夜中よなか時じ分ぶんでありました。そばにねていられたおばあさんが、いつものように、

「次郎じろうや、小便しょうべんにゆかないか。」といつて、ゆり起おこされましたので、次郎じろうは、すぐに起おき目めをこすりながら、はばかりにゆきました。そして、またもどつてきて、暖あたたかな床とこの中なかに入りました。家の外うちには、風かぜが吹ふいています。寒さむい晩ばんでありました。晴はれていて、雲くもがないとみえて、月つきの光ひかりが、窓まどのすきまから、障しょう子じの上うえに明あかるくさしているのが見みられました。

次郎じろうは、どんなに、だれも人ひとのいない家いえの外そとは寒さむかろうと思おもいました。それで、すぐにねつかれずに、床とこの中なかで、いろいろのこ

とを考かんがえていました。ちようど、そのときでありました。圃はたけのあちらで、だれか、ハーモニカを吹ふいているものがあつたのであります。

「いまごろ、だれだろうか？ 隣となりの勇ゆうちゃんかしらん。こんなに暗くらく遅おそいのに、そして寒さむいのに、独ひとりで外そとへ出でているのだらうか……。ああ、きつとお化ばけにちがいない！」次郎じろうは、こう思おもうと、頭あたまからふとんをかむりました。そして、息いきの音ねを殺ころしてしまいました。よくじつお翌あした日ひ起きてから外そとに出でてみますと、圃はたけの中なかには、昨きのう日ひつくつた雪ゆきだるまが、そのままになっていました。雪ゆきだるまは、ハーモニカを口くちに、往おう来らいの方ほうを見守みまもっていました。そこへ、勇吉ゆうきちがやってきました。

「次郎ちゃん、おはよう、雪だるまは凍って光っているね。」

「夜中に、勇ちゃんは、外に出て、ハーモニカを吹いた？ 僕は、

夜中に、ハーモニカの鳴るのを聞いたよ。」

「うそだ。だれが、そんな夜中に、ハーモニカを吹くものか？」

「そんなら、きつとお化けだよ。」

「お化けなんか、あるものか、次郎ちゃんは、夢を見たんだよ。」

「だって、僕は、ハーモニカの音を聞いたよ。」と、次郎はいい

ましたけれど、勇吉は、ほんとうにしませんでした。

その日の夜のことです。次郎は、ふたたび夜中に、ハー

モニカの音を聞きました。こんどは次郎は、だれが吹いているか、

それを見ようと、勇気を出して、戸口まで出てのぞいてみました。

外そとは昼間ひるまのように月つきの光ひかりが明あかるかつたのです。脊せの高たかい、黒くろいや
 せた男おとこが、雪ゆきだるまはなしと話をおとこしてました。その男おとこのようすは、ど
 うしても魔物まものであつて、人にんげん間まとは見みえませんでした。からだは
 全ぜん体たいが、細ほそく黒くろかつたけれど、目めだけは、光ひかつていました。
 「明日あしたの晩ばんには、うんと雪ゆきを持もつてきよう。」と、黒くろい魔物まものはい
 いました。次郎じろうは、風かぜの神かみだと思おもいました。その中うちに、黒くろい魔物まもの
 は、かきの木きの枝えだに飛とび上あがりました。そして、悲かなしい声こえで身みに
 しみるような叫さけびをあげると、長ながい翼つばさをひろげて、遠とおくへと飛と
 で消きえました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「小学少年」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「雪《ゆき》だるま」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪だるま

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>